

令和元年9月6日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370558

研究課題名(和文) 生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究

研究課題名(英文) A Contrastive Study of the Event Interpretation of Nominals in English and Japanese

研究代表者

小野 尚之 (Ono, Naoyuki)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：50214185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生成語彙意味論の枠組みを用いて英語と日本語の名詞の事象構造を分析し、意味の共合成やタイプ強制という観点から説明することを目的とする。名詞は一般に個体名詞と事象名詞に分けられるが、本研究では、個体を表す名詞も事象を含意することに着目し、その事象性の含意が項の選択や軽動詞構文、さらに動作主名詞の形成において意味の合成プロセスに関わることを、日英語のデータを用いた比較分析によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

名詞には「もの」を表すものと「こと」を表すものがある。しかし、一見「もの」を表すものでもその意味として「こと」を含意するものがある。例えば、「読者」は、「もの」(人)を表すが、同時に「読む」という行為(こと)も意味に含んでいる。「飲み物」も「もの」でありながら行為(こと)を含意している。このような名詞は、様々な環境において「もの」と「こと」の性質をもつ。このような性質を意味理論を用いて明らかにすることで、人間が意味を理解するしくみの一端を明らかにすることがこの研究の狙いである。また、同様の現象は、日本語だけでなく英語にも見られるので、日本語と英語を比較することでその異同を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to build a dynamic semantic theory concerning the event structure of nominals in English and Japanese. Nouns are in general classified into two types: individual and event nouns; however, object-denoting nouns often imply an event interpretation. The present study focuses on the event implication of nouns, in terms of the argument selection of nominals, the formation agent nominals and complex verb constructions with light verbs. We have revealed that the 'event interpretation' has to do with the semantic composition of those complex nominals.

研究分野：Semantics

キーワード：Nominalization Lexical semantics Event structure

1. 研究開始当初の背景

ある種の名詞には個体解釈と事象解釈が多義的に生じる。たとえば、beautiful dancer には、「容姿の美しさ(個体の修飾)」と「踊りの美しさ(事象の修飾)」の2つの解釈があることが知られている。このような名詞の事象性は、出来事そのものを指す event や meeting といった事象名詞とは異なる性質を持っている。

語彙意味論でこの問題を早くから取り上げた Rappaport Hovav and Levin (1992)によると、(1a)のように名詞が補部をとる場合、実際に行為を行った人間を表す事象的解釈が生じるという。一方、(1b)のような表現では、動作の主体というよりも職業としての行為者や道具や機械などのモノを表す個体的解釈が生じるとされる。(1) a. a grinder of imported coffees (事象的解釈) b. a grinder, a coffee grinder (個体的解釈) この2種類の解釈は、Pustejovsky (1995)では、「場面レベルの名詞」(=事象解釈)と「個体レベルの名詞」(=個体解釈)として区別される。英語では、ほとんどの-er 動作主名詞は両方の解釈を持つ。これに対し日本語では、たとえば driver を「運転者」とするか「運転手」とするかによって、前者と後者を形態的に区別することができる(影山 2002 など)。

2. 研究の目的

本研究は、生成語彙意味論の枠組みを用いて英語と日本語の名詞の事象構造を分析し、種々の構文における名詞のふるまいについて、意味の共合成やタイプ強制という観点から説明することを目的とする。名詞は一般に個体名詞と事象名詞に分けられるが、本研究では、個体を表す名詞も事象を含意することに着目し、その事象性の含意が項の選択や修飾関係、さらには軽動詞構文や複雑述語の形成において意味の合成プロセスに関わることを、日英語の比較分析によって明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、これまで継続的に進めてきた「動作主名詞の事象性」と「名詞の項選択」の課題についてさらなる分析と成果発表を行う。海外の先端的な研究動向を知るためにも、国際学会への積極的な参加を進める。次に、「軽動詞構文と複雑述語」の課題解決に向けた言語資料の整備を行う。同時に、研究の成果を国際的なジャーナルや学会において発信する。

4. 研究成果

本研究の中心的なテーマである「動作主名詞の事象性」および「名詞の項選択」についての検討を行った。この検証作業を進めることによって、英語の日本語のデータの比較から名詞の事象性についていくつかの具体的な問題点が浮き上がった。その一つは、動作主名詞における事象解釈の問題である。日本語には動作主を表す名詞に出来事的な解釈のあるものと恒常的な性質の解釈を持つものを形態的に区別することができる。例えば英語の driver に対し、運転者と運転手の2通りの名詞形態があるが、これがそれに相当する。日本語の動作主名詞における事象解釈について論文を書き、国外の出版社から出版された論集に発表した。

動作主名詞には、事象への実際の関与を含意するものとしめないものがあるが、この点に関して Pustejovsky (1995)では、「場面レベルの名詞」(=事象解釈)と「個体レベルの名詞」(=個体解釈)という区別を導入している。この違いは次のような例で示することができる。場面レベルの名詞としては、pedestrian, passenger, customer, smoker, winner など、また、個体レベルの名詞としては、violinist, professor, doctor, author, magician などがある。英語では、ほとんどの-er 動作主名詞は両方の解釈を持つ。一方日本語の方に目を移すと、日本語では、たとえば driver を「運転者」とするか「運転手」とするかによって、前者と後者を形態的に区別することができる(影山 2002 など)。以上を踏まえて、平成26年度は、日本語の動作主名詞「者」「手(しゅ)」「手(て)」「主(ぬし)」「(家)」などについて上記の区別による分析を行い研究論文にまとめた。本論文は海外出版社より出版した。

研究の成果を国際学会「The 9th International Conference on Practical Linguistics of Japanese」で発表した。また事象構造の分析として「事象フレームの類型と二つの達成事象」という論文を発表した。この論文の中では、「動詞フレーム」「サテライトフレーム」として事象構造を分類できるとする仮説の背景には、達成事象の二つのタイプ、すなわち漸増的達成事象と差分的達成事象が存在すること、そしてその違いによってはこれまで明確に議論されてこなかったことを論じた。その上で、事象意味論的な分析によって実は異なるものであること提示することができた。また併せて日本語の reduplication についての研究を進め、語彙意味論の観点から分析を行った。その成果は共編として出版した論集に収められた。この研究では日本語の重複語に焦点を当て、この表現形成過程が他には見られない特徴を持つこと、そしてそれが名詞の意味に深く関係していること絵を論じた。

「軽動詞、複雑述語」と「名詞の事象性」のテーマのうち、特に意味の多重性に関わる問題で名詞の事象性を明らかにすることを試みた。その成果は、論文にまとめ 高見健一(他)編『不思議に満ちたことばの世界』(開拓社)に「くびき語法と多義のしくみ」と題する論文として発表した。また関連する専門的な問題としては、平成28年9月にポルトガル、リスボンで開催された European Association of Japanese Studies、同年10月に中国天津で開催された国際学術会議などで発表および討議を行った。

本研究で明らかにしたことは次の通りである。名詞には「もの」を表すものと「こと」を表すものがある。しかし、一見「もの」を表すものでもその意味として「こと」を含意するものがある。例えば、「読者」は、「もの」(人)を表すが、同時に「読む」という行為(こと)も意味に含んでいる。「飲み物」も「もの」でありながら行為(こと)を含意している。このような名詞は、様々な環境において「もの」と「こと」の性質をもつ。このような性質を意味理論を用いて明らかにすることで、人間が意味を理解するしくみの一端を明らかにすることがこの研究の狙いである。また、同様の現象は、日本語だけでなく英語にも見られるので、日本語と英語を比較することでその異同を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

小野尚之「構文的重複語形成 『女の子の子した女』をめぐって」2015, 9. 由本陽子・小野尚之(編著)『語彙意味論の新たな可能性を探って』pp. 463-489. 開拓社

Ono, Naoyuki. Agent nominals. 2016, 2. Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds) Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation, pp. 599-630, De Gruyter Mouton.

小野尚之「事象フレームの類型と2つの達成事象」2016. 6. 菊地朗、秋孝道、鈴木亨、富澤直人、山岸達弥、北田伸一(編)『言語学の今を知る26考』pp. 186-198 研究社

小野尚之「くびき語法に見る多義のしくみ」2017. 3 高見健一、行田勇、大野英樹(編)『不思議に満ちたことばの世界』pp. 17-21.

Ono, Naoyuki. Constructional Reduplication in Japanese. 2017 How to Learn? Nippon/Japan as Object, Nippon/Japan as Method. Christopher Craig, Enrico Fongaro and Ozaki Akihiro (eds.) pp. 285-294

Ono, Naoyuki. Lexical Creativity: Contrastive Focus Reduplication and Constructional Reduplication. 2019. Journal of English Linguistics Society, Japan

[学会発表](計4件)

小野尚之「非語彙的重複語形成—「女の子の子した女」をめぐって」言語と情報研究プロジェクト第49回公開セミナー公開講演会. 広島大学総合科学研究科 2015.1.23.

Ono, Naoyuki. The Lexical Semantics of Constructional Reduplication in Japanese. MAPLEX 2015 (Multiple Approaches to the Lexicon), 2015.2.10, 山形県天童市ホテル滝之湯

Ono, Naoyuki. Lexical Creativity: Contrastive Focus Reduplication and Constructional Reduplication 日本英語学会国際春季フォーラム 2018. 5. 12 北海道大学

小野尚之「くびき語法に見る多義のしくみ」北京大学創立120周年国際学術研究会 2018. 6. 2 北京大学

[図書](計1件)

由本陽子・小野尚之『語彙意味論の新たな可能性を探って』(共編著)2015.9. 開拓社 498 pp.

6. 研究組織

(1)研究代表者

小野 尚之 (ONO, NAOYUKI)

研究者番号 : 50214185

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。